

研究課題	海外・日本人学校に向けた大学生によるオンライン陸上競技指導の実践：ICT機器を用いた遠隔地の体育・部活動に向けた学習効果の検証		
氏名	松山 直輝	所属 教育インキュベーション推進機構 アート・アスレチック教育センター	職名 講師
APRIN e-ラーニングプログラムの受講		<input checked="" type="checkbox"/> ←受講済の場合はチェックをすること	
【研究成果の概要】 （文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度）			
1. 取り組みの概要			
<p>在外教育施設内の部活動文化は、日本人子女のアイデンティティ形成に重要な役割を果たしている。一方、教員数の制限から、特にスポーツ部活動では専門的指導者の不足という課題に直面している。日本の部活動は、技能習得のみならず社会性や内発的動機付けを育む教育実践に位置づけられるが、専門的指導に悩む指導者や、専門的指導を欲する生徒は少なくない。</p> <p>本研究は、以上の専門的指導者が不足する課題を解決するため、ICT機器を活用した遠隔部活動の実証研究を実施した。具体的には、日本国内の専門的指導者（大学教員および学生）とベトナム社会主義共和国の「A日本人学校」中学部陸上競技部（18名）をオンラインで結び、短距離走（50m走）の指導を実施することを計画した。また、ICTを用いた運動学習支援のデザインが、在外教育施設という特殊な環境下でどのように受容され、生徒にどのような変容をもたらすかを明らかにすることに本研究は焦点をあてた。</p>			
2. 方法			
2025年5月から10月の期間、全17回の遠隔指導を計画した。			
① 指導体制と環境構築 ：日本側の指導者は、陸上競技の競技経験を持つ大学教員と学生が担当する。A日本人学校と日本側に、ICT機器（スマートフォンとモバイルモニター等）を活用した遠隔環境に加え、AI搭載型自動追尾カメラによる視覚補助と、騒音下でも明瞭なスピーカーによる聴覚情報を統合したシステムをそれぞれ構築する。			
② 学習支援のデザイン ：指導は「姿勢（体幹の安定）」「四肢の協調（腕振りと脚の同期）」「加速局面の歩数」の3点に焦点を当てた。			
② データ収集 ：単一群事前事後テストデザインを採用し、50m走のタイム（事前・事後）のほか、アンケート調査により心理的変容（自信・楽しさ）や学習成果、日本型部活動文化の受容について調査した。			
3. 成果			
全17回のセッションは計画通り完遂され、以下の3点において顕著な成果が得られた。			
① パフォーマンスの向上 ：事前・事後テストの両方に参加した生徒全員のタイムが向上し、平均で0.61秒の短縮（8.47秒から7.86秒）が確認された。統計的に有意な差（ $p < 0.001$ ）が認められ、効果サイズ（ $d = 1.17$ ）も「大きな効果サイズ」に該当し、遠隔指導が身体運動の改善に極めて有効であることが実証された。			
② 学習者の心理的・認知的変容 ：アンケートの結果、76.9%の生徒が自信の向上を、92.3%が楽しさの増加が報告された。全ての生徒が「意識すべきポイントが明確になった」と回答し、更には言語的イメージを自己の身体感覚と結びつけて内面化するプロセスが確認された。また、ICT機器を介した指導が、生徒の「身体の気づき」を促し、主観的な運動制御に影響を与えたことが考察される。			
③ 日本型部活動文化の越境的受容 ：92.3%の生徒が本取り組みを肯定的に評価し、「ベトナムでも日本の部活動に似た経験ができた」との回答が得られた。専門的指導へのアクセスが可能になったことで、地理的境界を越えて日本の教育文化の本質を継承・受容できる可能性が示された。			
4. 結論と今後の展望			
本研究は、ICT機器を媒介とした学習支援デザインが、在外教育施設におけるスポーツ部活動の専門的指導者不足の課題を解決する有効な手段となりうることを明らかにした。今後は、より			

大規模な対象での検証や、他競技への展開、さらには専門領域と協働した学習支援モデルの精緻化が課題となる。

【研究成果発表方法】

以上の成果を日本コーチング学会「コーチング学研究」等へ投稿することを予定している。

※発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。